

112 P3肺癌切除例の予後

大阪大学第一外科

○松村晃秀、中原数也、藤井義敬、南 正人、稲田啓次、奥村明之進、末岐博文、尹 亨彦、貴島弘樹、竹内幸康、小川達司、阪口全宏、岩崎輝夫、松田 暉

【目的と対象】1982年以後1992年までの原発性肺癌切除359例のうち術後病理病期でP3と診断された75例(20.9%)の術後予後因子を検討した。

【結果】75例中隣接臓器浸潤によるもの45例で、うちT3症例30例、T4症例15例であった。隣接葉への直接浸潤による葉間P3症例は30例で、このうち葉間P3のみの症例は20例で、10例には隣接臓器浸潤も見られた(T3:8例、T4:2例)。N因子との関係では、P3症例全体ではリンパ節転移陽性率は49/75(65.3%)で、P2以下の症例の陽性率75/356(21.1%)より有意に($P<0.0005$)高率であった。葉間P3のみの症例14/20(70%)と、T3-T4+葉間P3(±)症例との間にはリンパ節転移陽性率に有意の差はなかった。葉間P3のみの症例の術後5年生存率は31.8%で、T3-T4+葉間P3(±)症例の13.4%より有意($P<0.05$)に良好であった。葉間P3のみの症例の術後生存率は、全摘症例(11例)の5生率27.5%と、他の術式の5生率37.5%の間に有意の差はなかった。

【まとめ】1.肺癌切除例359例中75例(20.9%)のP3症例の予後を検討した。2.P3症例はリンパ節転移陽性率が65.3%と高く、予後不良の一因と考えられた。3.葉間P3のみの20症例においては、隣接他臓器浸潤を伴ったP3症例より有意($P<0.05$)に予後が良好であった。また、全摘術は葉間P3のみの症例の予後を改善させなかった。

114 T4肺癌切除例と非切除例の検討

東京医科大学外科

○齋藤 誠、奥石晴也、土田敬明、田口雅彦、齋藤 宏、奥中哲也、鬼頭高尚、小林寿光、高橋秀暢、河手典彦、小中千守、加藤治文

【目的】T4肺癌の診断、治療成績、予後因子を手術例と非手術例について検討したので報告する。

【対象】過去15年間のT4肺癌の切除例60例と非切除例137例を対象とした。

【結果】切除例で術前T4と診断し得たのは16例(26.7%)のみで、逆にcT4と診断し手術を行ったうちの19例中16例(84.2%)がpT4であった。術前後のN因子の一致した症例は60例中26例(43.3%)で、術前の過小評価を同数に認めた。切除例全体の5生率は13.9%で、非切除例は8%であった。術後3年以上生存した7例はN、M因子が低く、全例単一臓器浸潤であり、術後補助療法が行われていた。術前後の因子はcN3および根治性と予後とに差を認めたが、組織型、胸膜播種、pm、拡大合併切除、放射線治療の有無との関係は認められなかった。

【結果】現時点では、術前の悪性胸水を除き、開胸時の播種を含むcT4、cN0-2、cM0-1(切除予定肺のPM)は手術適応と考えられた。

113 胸壁浸潤(T3)肺癌切除症例の検討

滋賀医科大学第2外科

○吉田美紀子、藤野昇三、小西孝明、浅田佳邦、桂 敦史、榎堀 徹、朝倉庄志、加藤弘文、森 渥視

【目的】T3として一括される胸壁浸潤症例を壁側胸膜浸潤例(T3ab)と骨性胸壁浸潤例(T3cd)に分類し、臨床面から検討を加えた。

【対象】胸壁合併切除が行われた43例中、T4症例を除いた37例(同期間の肺癌切除症例349例の10.6%)を検討対象とした。

【結果】組織学的に浸潤が胸膜下組織にとどまっていたもの(T3ab)は18例(扁平8例・腺7例・その他3例、ⅢA期14例・Ⅳ期4例)で、3生率42.0%(3生例4例)・5生率31.5%(5生例3例)であった。一方、肋骨または肋間筋に浸潤がみられたもの(T3cd)は19例(扁平11例・腺5例・その他3例、ⅢA期14例・ⅢB期1例・Ⅳ期4例)で、3生率12.0%(3生例2例)・5生率12.0%(5生例1例)であった。ⅢA期症例に限っても、T3ab(14例)は、3生率46.4%・5生率34.8%、T3cd(14例)では、3生率・5生率ともに17.1%で、T3abで予後良好であった。リンパ節転移度別、組織型別に両群の比較をしても同様の傾向であった。3年以上の生存例は、全例ⅢA期症例であった。また、主訴として胸痛を訴えたものは、T3abでは7例(38.9%)、T3cdでは15例(78.9%)であった。性別・平均年齢・Brinkmann Indexなどには差はみられなかった。

【結語】T3として一括される胸壁浸潤症例において、壁側胸膜に浸潤が留まるものでは、骨性胸壁浸潤例と比較し予後良好であった。

115 T4肺癌手術症例の検討

長崎大学第一外科

○高橋孝郎、中村昭博、赤嶺晋治、辻博治、田川泰、川原克信、綾部公懿、富田正雄

目的：T4肺癌手術症例について検討した。

対象：1982年から1993年4月までに切除したT4症例34例を対象とした。

結果：年齢は37才-78才で男31例女3例であった。組織型では扁平上皮癌21例、腺癌11例、大細胞癌2例でリンパ節転移はn0 13例、n1 2例、n2 16例、n3 3例であった。T4の理由は大血管浸潤10例、気管分岐部浸潤10例、左房浸潤7例、悪性胸水6例、椎骨浸潤1例であった。手術は大血管浸潤例に対して上大静脈人工血管置換9例、パッチ形成1例が行なわれ、気管分岐部浸潤に対して切除再建6例、sleeve pneumonectomy 4例が行なわれ、悪性胸水に対して胸膜肺剥離2例が行なわれた。症例全体の生存率は1年35%、2年19%で3年生存は得られなかった。2年以上生存の5例をみると、扁平上皮癌2例、腺癌3例；n0 3例、n2 2例；大血管浸潤2例、悪性胸水2例、気管分岐部浸潤1例であった。

まとめ：T4肺癌切除例の予後は不良であった。しかし、QOLの改善の点で意義のある症例もあり、切除の適応は慎重にすべきと考えられる。